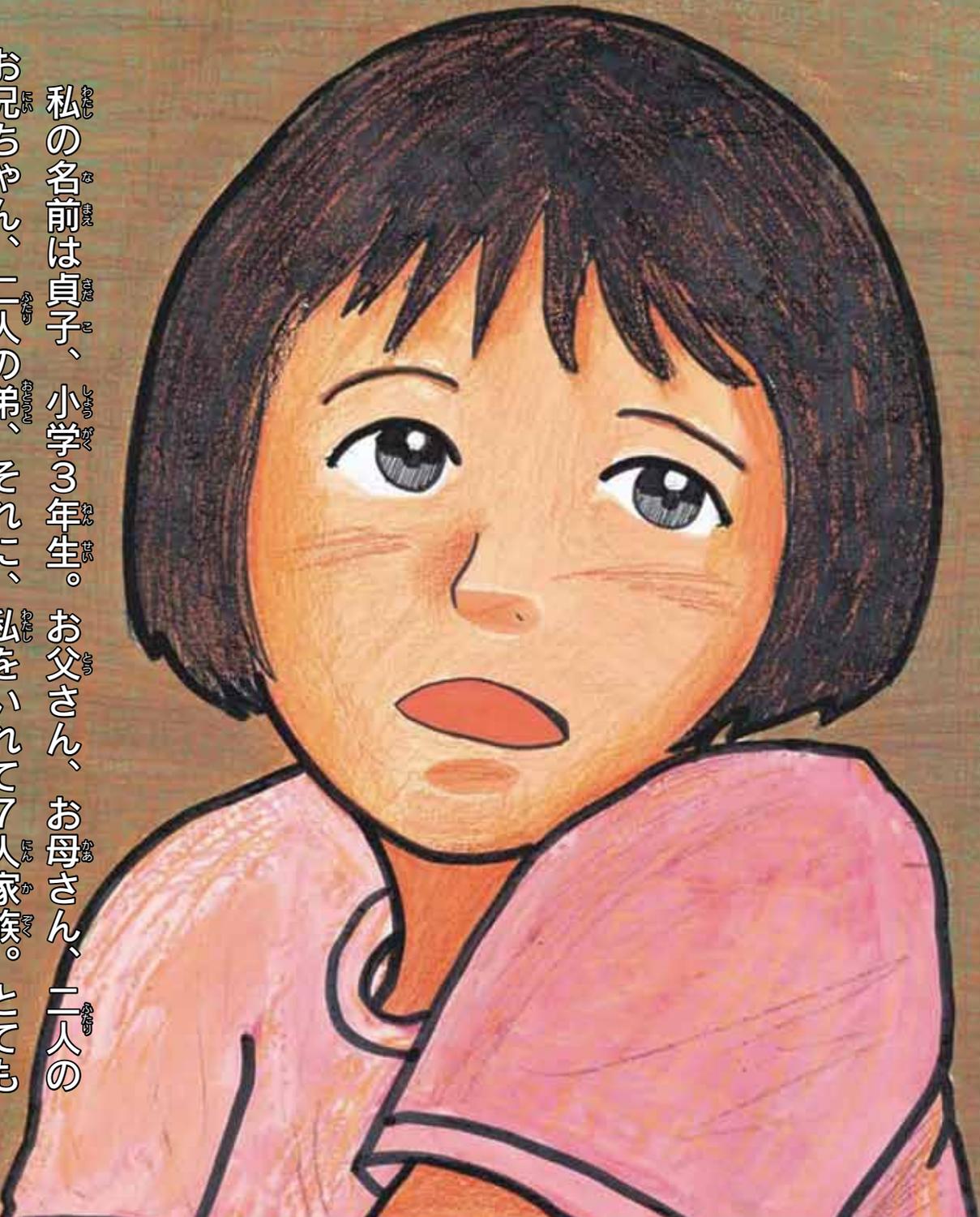




生 た る

絵：小林 一美
モデル・文：千葉 貞子



私の名前は貞子、小学3年生。お父さん、お母さん、二人のお兄ちゃん、二人の弟、それに、私をいれて7人家族。とても楽しい毎日を過ごしていました。

ところが、昭和二十三年九月十六日、この日私にとって、一生忘れることのない恐ろしい出来事がありました。

4、5日前からずっと降り続いていた雨が、その日の夕方、ようやくく止もつとじていました。

私は、いつもより早い夕食を終え、パジャマに着替えないで弟たちと一緒に布団に入りました。



「早く起きろ。水がでたぞ、早く起きるんだ」
お父さんの叫ぶ声で私たち兄弟は飛び起きました。
私はすぐにわかりました、磐井川が氾濫したのだと。

「おい、こっちだ、早く、こっちに来い。逃げるんだ」

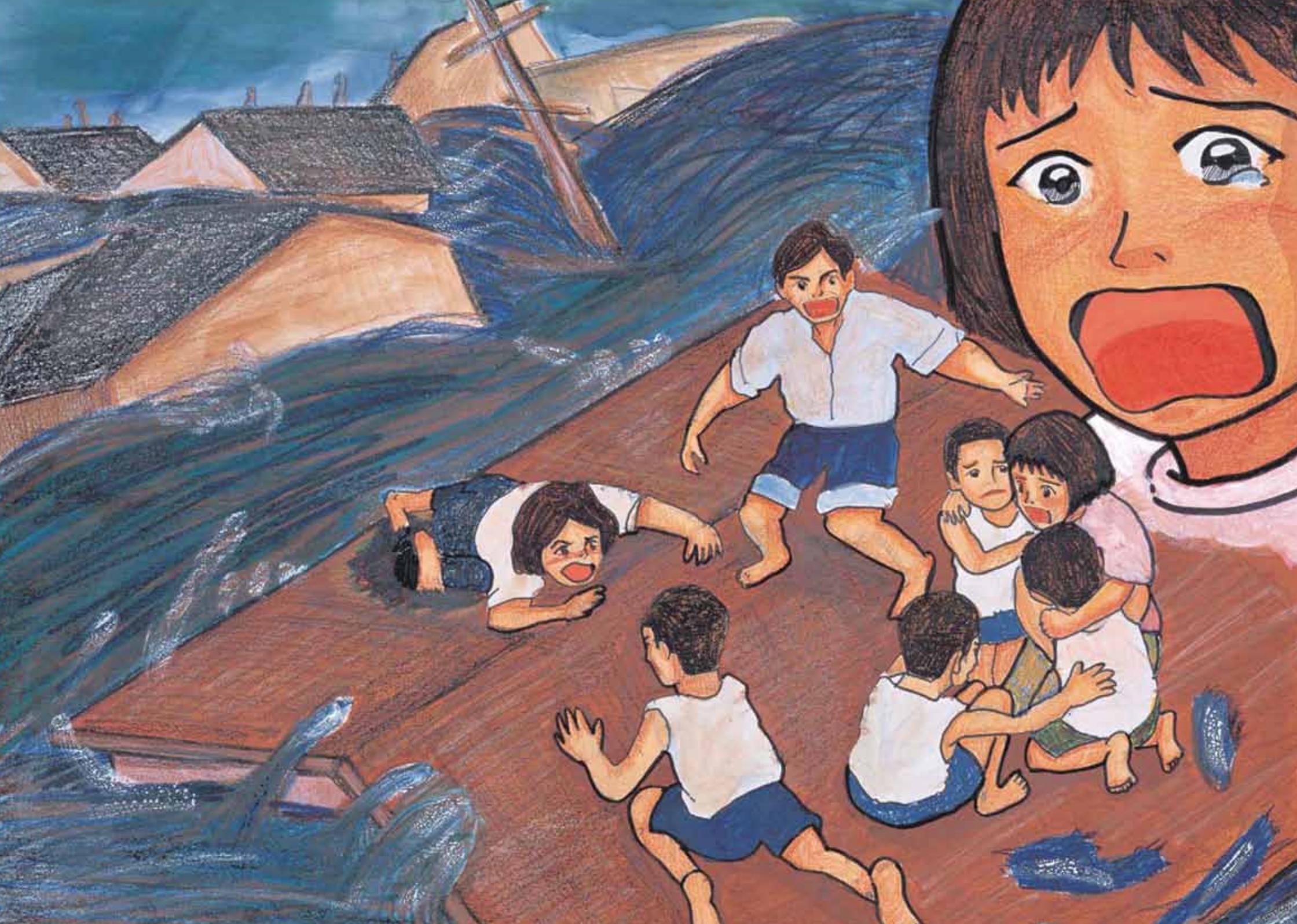
ますます大きくなるお父さんの声を頼りに、電気の消えた
真っ暗な部屋を手探りで前に進みました。

もう私の後ろには水が迫っています。

「死にたくない」

私は必死に前に前に進みました。何とか家族全員が2階に上
がれたと思ったのも束の間、あっという間にもものすごい勢いの
水が私たちを追いかけて2階へと押しよせてきました。

「屋根に登るぞ」



杉皮で出来た天井は簡単に壊せ、私たちはその穴から屋根に這い上がりました。

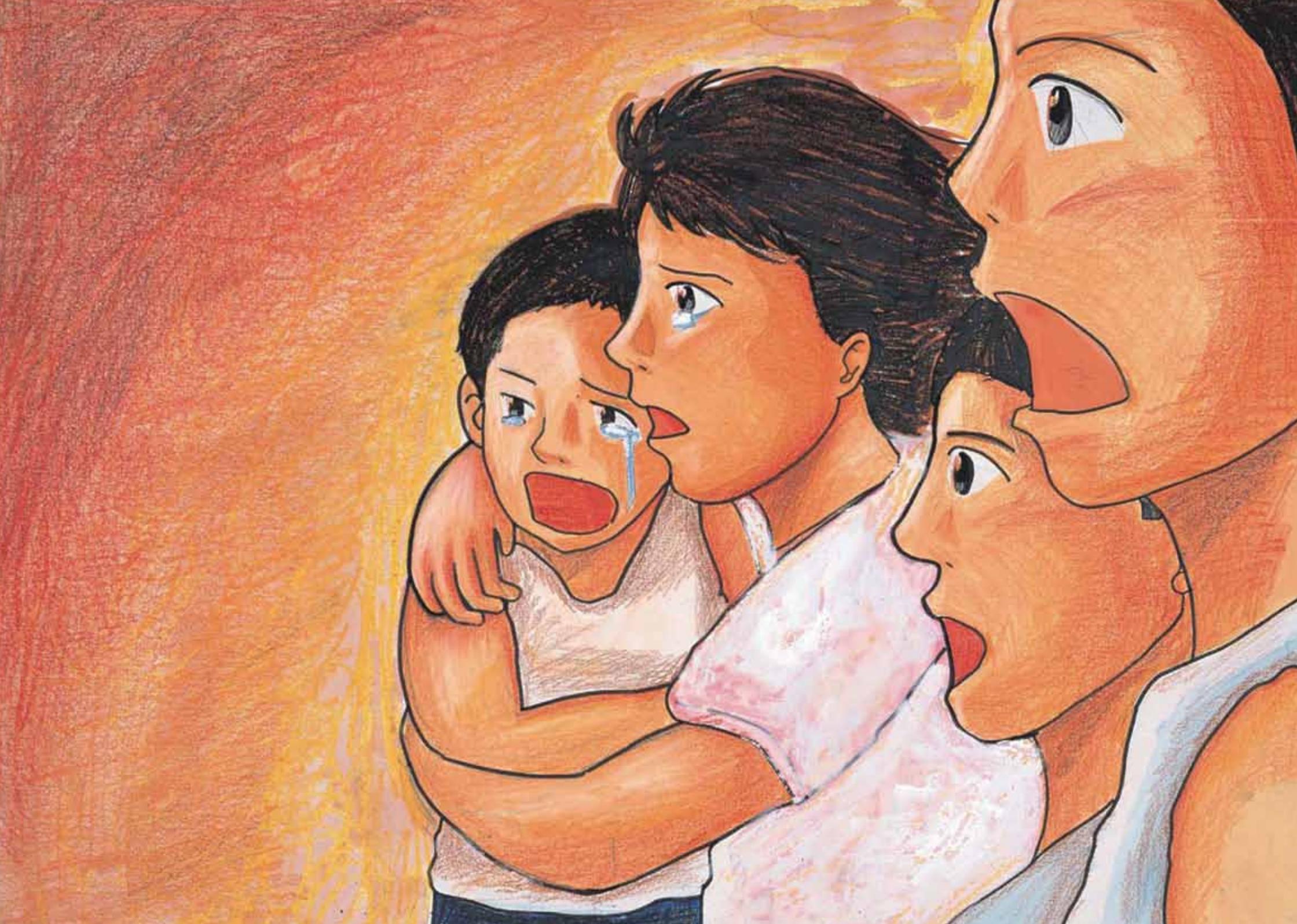
一番最後に逃げてきたお母さんは、身体半分が水にのまれていたけれど、自力で登ってきました。

後でわかった話ですが、実はこの時、お母さんのお腹の中には赤ちゃんがいたそうです。

屋根の上では皆、手をしっかりと握っていました。

「何がおこるの、私たちはどうなるの」
そう思うと私は恐ろしくて悲しくて、たまらず握っている手に力が入っていました。

泣き叫ぶ声、助けを求める声、ものすごい勢いの水の中に消えていく人たち。今までに見た事のない光景。



その時、地主町の南の方が急に明るくなり火の粉が降ってきました。地主町が火事になったのです。飛び散る火の粉はとも熱いし、屋根のすぐ下まで水が迫ってきているし、全然生きた心地がしませんでした。

すると今度は、濁流に押し流された大量の木材が、一気に私たちの家に迫ってくるではありませんか。

「カチカチカチカチーン」

ものすごい音と共に私たちは、あっという間に家ごと水の中にくずれていきました。

「怖いよ、怖いよ」

怖がる私たちにお父さんとお母さんは、

「大丈夫だよ、大丈夫だよ」

と何度も繰り返し言ってくれました。

しばらく流された所に東北本線が見えました。その線路まで水が押し上がっていました。私たちがその線路を越えようとした瞬間、



「ドォーン」

という音がして、すごい衝撃がありました。

と同時に、後ろ向きに座っていたお母さん、一番上のお兄ちゃん、7歳の弟が濁流の中へまっ逆さまに落ちてしまったのです。



「ゴッホゴッホゴッホ」



「お母^{かあ}ちゃん」

「お母^{かあ}ちゃん」

「お母^{かあ}ちゃん」



誰一人、最後の言葉をかけてあげることができませんでした。
ほんの一瞬の出来事でしたから。

「お前たちしっかりつかまれ」

「必ず助かる、がんばるんだぞ」

お父さんは、涙をこらえながら私たちを励ましてくれました。



「ザバーン」

その後、私^{わたし}たちも濁流^{だくりゅう}の中^{なか}に飲^のまれてしまいました。

「みんな大丈夫^{だいじょうぶ}か、お父^{おとう}さんは

「ムン」だぞー」

「みんながんばれ」



私はお父さんの声だけを頼りに必死で水の上に顔を出しました。たくさん水を飲んで、とても苦しかったけれど、お父さんの、

「がんばれ」

という声に勇気付けられながら目の前にある流木になんとかつかまりました。

「お父さん私は『ん』よ」

「ぼくは『ん』だよ」

「みんな大丈夫、がんばるぞ」

必死で声をかけあいました。

川幅はだんだん広くなり、いつの間にか磐井川から北上川へ出ていました。わめき声や叫び声は、もうほとんど聞こえず、あたりは静かでした。

私にはその静けさがとても不気味でした。



しばらく流ながされていいるうちに、なんとお母かあさんと一緒いっしょに濁流だくりゅうに飲のまれた弟あにいもうとに再会さいかいしたのです。

「よし、みんながんばるぞ、絶対助すけかるぞ」

「よかった」私わたしは心こころの中でそう思おもいました。

それから私わたしたちはどこに流ながされるとでもなく、流ながれに流ながされていきました。もう流ながされてからどれくらいたったのでしよう。

「お父おとうさん、私わたしもうダメだ、身体からだがダルいし、眠ねむいしもう疲つかれたよ」

「眠ねむったらダメだぞ、みんなガンバレ、ガンバレ」

お父おとうさんの声こゑだけが響ひびきます。

「お前まえたち、大きく息いきを吸すってもぐるんだ」

お父おとうさんの声こゑで、私わたしは思い切きってもぐりました。

薄衣うすぎの鉄橋てつしやうをくぐらなければならなかったのです。

途中息ちゆうちゆういきが苦くしくなつて、何度なんども沈しずんだり、這はい上あがったりしながらもなんとか、その鉄橋てつしやうも通過つうかしました。

A painting of a whirlpool in shades of blue and brown. Two people are struggling in the water. One person's head is visible at the top right, looking distressed with their mouth open. Another person's head is visible at the bottom, with their hair dark and matted. The water is swirling in a circular pattern, creating a sense of being pulled in.

静かな流れの中にいたと思った瞬間、私は
ちはものすごい勢いで大きくなうずの中へ吸い
込まれてしまったのです。



「うーん苦しい息ができない」

川底まで深く沈んでいきます。

「もうダメだ 死んでしまっ」

そう思っていたら今度は、上の方へ、上の方へ
押し上げられ、水面に浮かび上がったのです。

「うわ」

気がつくと、私は岩場へ投げ出されていました。

「お、お父さん、お兄ちゃん」

真っ暗闇の中で私以外、誰もいませんでした。私はヌルヌルとした岩肌を必死で這い上がり、たった一人で夜を明かしました。

「お父さん、どこへいったの」

「お母さん、どこへいったの」

「みんな、どこへいったの」

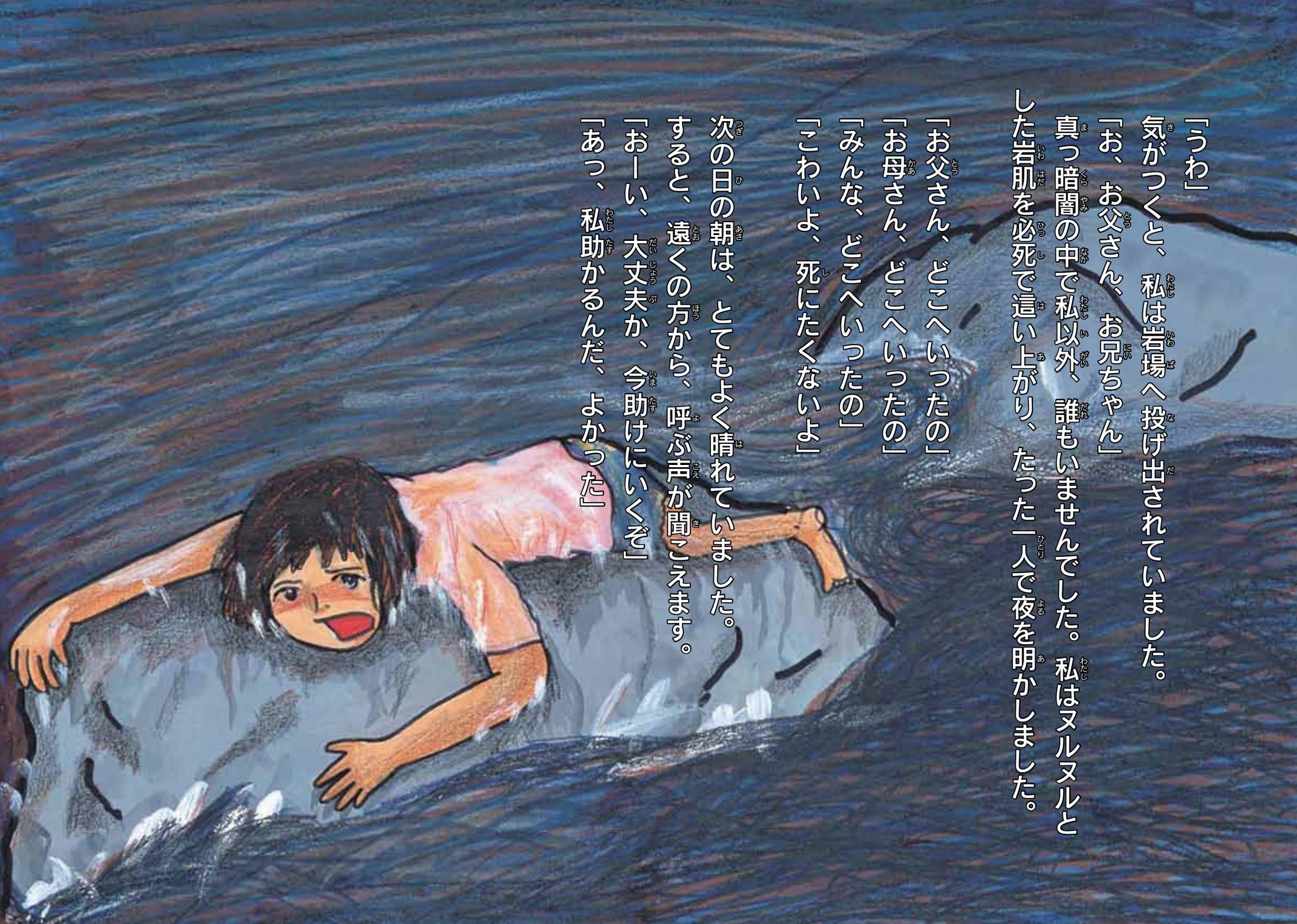
「こわいよ、死にたくないよ」

次の日の朝は、とてもよく晴れていました。

すると、遠くの方から、呼ぶ声が聞こえます。

「おい、大丈夫か、今助けにいくぞ」

「あっ、私助かるんだ、よかった」



「がんばったな、一人で」
そうして私は小野寺梅
五郎さんという方に助けら
れました。ここは宮城県中
田町川欠という所だそうで
す。

お父さんはもう少し下
流の浅水という所で助けら
れ、その後私を迎えに来て
くれました。

お母さんは三関で遺体で
発見されました。お母さん
と一緒に流されたお兄ちゃ
んは三関の桑の木にひっか
かって助かりました。

一緒に流されてきた二
番目のお兄ちゃんと二人
の弟はいまだに発見され
ていません。

この絵本を通してみなさんに伝えたいこと

1 「命の大切さ」

生きるということは本当に大変なことです。
しかし生きていければ、楽しいこと、うれしいこと、
素晴らしいことがたくさんあります。

2 「人と人との出会い、出会いの大切さ」

たくさんの方と出会うことで、心と心のふれあい、
温かな心の交流、親切、やさしさ、いたわり、そして、
喜びや楽しさを知ることができます。

3 「頑張れば、何事も為しとげられる」

自分は絶対に生きる、生きたいという強い気持ち、
そして最後まで頑張ろうという気持ちを持ち続けて
ほしいと思います。

発行 令和4年9月

国土交通省東北地方整備局
岩手河川国道事務所